

令和8年度 第1回 岡崎市生涯学習推進委員会 会議録

1 開催日時

令和8年7月13日（月） 10時00分～10時50分

2 開催場所

図書館交流プラザ 会議室 302

3 委員出欠状況

(1) 出席委員

益川 浩一 委員長（岐阜大学副学長補佐（地域連携担当）・教授）
山田美代子 委員（りぶらサポータークラブ副代表、市民協働推進委員）
葉山 栄子 委員（生涯学習コーディネーター、元岡崎市社会教育委員、
元名古屋学芸大学参与）
平岩 亮人 委員（特定非営利活動法人 岡崎まち育てセンター・りた
統括管理責任者、市民協働コーディネーター）

(2) 欠席委員

江良 友子 副委員長（愛知学泉大学短期大学部
生活デザイン総合学科 学科長 准教授）
矢田 綾子 委員（市民公募委員）
野澤 琳 委員（市民公募委員）

4 事務局出席者

社会文化部

山田 能正（部長）、手嶋 俊明（専門監）

生涯学習課

岡田 武士（課長）、羽田 正輝（副課長）、
蜂須賀 幹康（総務企画係長）、岩田 弘志

中央図書館

佐々木 健二（館長）、丸本 洋乃（副館長）、
上川畑 史江（情報サービス係長）

5 傍聴者

0名

6 委員長挨拶（省略）

7 社会文化部長挨拶（省略）

8 報告事項

- (1) 令和8年3月に策定した第3次岡崎市生涯学習推進計画改訂版について事務局から報告した。

<以下、委員の意見等>

意見無し

- (2) 岡崎市の生涯学習の方針や状況について事務局から説明した。

<以下、委員の意見等>

委員： 講師登録について、登録するだけでは埋もれてしまうため、周知も積極的に行わなければならない。

事務局： 御指摘のとおり周知等を推進する。

委員： 人材バンクの有用性については各地で議論がある状況である。個人が学ぶだけではなく、その成果を地域・社会に還元することも生涯学習の一環であるが、講師になろうと思っても、教えるための技術・知識が不足していることが多く、ハードルが高い。そこを解消する見込みはあるか。

事務局： りぶら講座や市職員出前講座では講師向けに講座開催に関する解説動画等を活用している。講師登録制度でもこれを活用するなど、講師の育成も行っていきたい。

委員： 講師に挑戦する方は専門分野については十分な知識を持っているものと期待されるが、専門外のこと、講座開催に関する知識等は持ち合わせていないと思われるため、講師として活動するにあたっての支援を期待する。

委員： 地域交流センター、市民活動センターでもまちびとステージという取組を行っており、特技を活かしたい個人・団体が活躍の場を募集している。始めた当初は認知度が低く年間10件程度だったが、継続して運営することで周知が進み、今では年間130件程度のマッチングが成立している。講師登録制度を始めるにあたり、まちびとステージなどと連携を取りながら進めてはどうか。

事務局： 御指摘のとおり連携して進めていきたい。

委員： マッチングされた人たち同士がつながり、地域の活性化につながることを期待される。

委員： 計画のアンケート結果で、前回アンケートから比較してきっかけが無い、情報が無いという、主催者努力で改善できる項目が減っているのは改善されていると感じる。一方で、意欲がわからない、仲間や友達がい無い、経済的な余裕が無いというような、主催者努力で対応が難しいところが増えてきているのがよくない傾向であるように感じる。主催者側では対応が難しいかもしれないが、参加のハードルを下げるような工夫が必要ではないか。

事務局： 検討し、参加しやすい催しを企画する。

委員： 拠点があって、そこに講座を設置して、市民に来てもらうという形も生涯学習の一形態ではあり、拠点があるという点は重要だが、一方で講座の提供側から出向く、アウトリーチ的な形態も必要である。

委員： アンケートで学びたいものが学べないという項目があるが、これは学ぶ意欲はあると見てよいのではないか。学びたいテーマの講座が無いのか。どう考えているかのデータはあるか。

事務局： アンケートの内容を見ると、遠くでやっているので行けない、学んでいた講座が何らかの形で無くなってしまった等の意見がみられた。講座については講師を増やして循環していくことができればよいと考えている。

委員： 地域の方が何を学びたいと思っているのか、いわゆる要求課題に応じて学習の場を用意することも重要だが、学びたいとは思っていないが、学ぶ必要がある、学んでおいた方がよいという必要課題に対するアプローチも踏まえ、複眼的に学びの機会を設ける必要がある。

委員： 今後はデジタル化、DX化が大事になってくと思うが、ネットでも参加できる催しを企画してほしい。

事務局： 若い方はもちろん、最近はデジタルに強くない高齢の方でもスマホは持って使っているという話を聞いている。そういった方のハードルを下げるような催しなども推進していきたい。

委員： 今後キーワードになるのは多様性、包摂性である。循環を考えると若年層や学校にアプローチをしなければならないし、アウトリーチで障がいやハンディキャップにかかわらず接近していく必要がある。DXもま

さに必要課題的な部分があり避けられない。要求課題と必要課題、対面で触れ合いながらつながりを深める、D Xを活用して場所的な制約を取り払う、これらのベストミックスを考えたいうえで多様な生涯学習の場を設けてほしい。